

「片親って常識なさそう」

SNSでこんな書き込みを目にしました。

「何も知らないのにどうしてそんなことが言えるの。」怒りと悲しみが同時に湧いてきました。なぜなら、私も「片親」と呼ばれる立場にあるからです。

私は、父と兄と三人で暮らしています。母は、私が小学三年生のとき、肺がんでの世を去りました。突然の別れは幼い私にはあまりにもショックだったことを今でも鮮明に覚えています。

母が亡くなってから、私たちの生活は一変しました。料理は三人で分担、自分のものは自分で洗濯する。「お母さんってこんなに大変だったんだ。」家事をこなすのは想像の数倍難しく、母の存在の偉大さを痛感しました。

私がつらいとき、悲しいとき、いつも支えてくれたのは、父と兄でした。父は仕事と家事を両立し、私たち兄妹を必死に支えてくれました。兄も文句ひとつ言わず家事をこなし、時には私の相談にのってくれました。

私の家族の形は変わってしまいましたが、変わらず大切にしていることがあります。それは、毎日の生活の中で当たり前だと思っていたこと一つ一つへの感謝と、あきらめずに前を向く強さです。父が背中であげてくれたこと、兄が黙って寄りそってくれたことから私は人として大切なことを学びました。

世の中には父子家庭というだけで「かわいそう」「父子家庭はちゃんとしたしつげができない」と決めつける声が存在しているのが現実です。でも、私はそういう声に負けたくありません。私は今とても幸せです。だからこそそういう言葉が間違っていると伝えていきたいです。

笑ったり、時にはぶつかったり、助け合ったりしながら、私たちは三人で「家族」を作っています。家族にはいろいろな形があります。どの形にもそれぞれの幸せと意味があります。私はそのことをたくさんの人に伝えたいです。

そして、私の周りにはもう一つ私を支えてくれる人たちがいます。友達のさりげない言葉にどれほど元気づけられたかわかりません。「困ったらいつでも頼っていいからね。」「今日も元気で良かった。」そんな短い言葉がどれだけ私の言葉をかろくしてくれただか。先生方は、私の小さな変化に気づき、声をかけてくださいました。

身近な誰かの優しさや言葉が、どれほど力になるか、大きな支えになるか。私はそのありがたさを誰よりも知っています。

私は、この経験を通して「人の痛みに気づける人になりたい。」と思うようになりました。どんな家庭でも、どんな背景でもその中には大切な物語があります。私は、その物語を大切にできる人でありたい、誇れる人でありたいと思っています。そして、周りの人にも「どんな家族の形でも誇っていいんだよ。」と伝えていきたいです。

これまで私は、自分の家庭のことをどこかで恥ずかしく感じていた時期がありました。周りと違う家族の形を持っていることで「普通じゃない」と思われたくないという気持ちがいとも間にか自分を小さくしてしまっていました。授業で家族について話す時や母の日の行事がある度にどこかモヤモヤした気持ちを抱いていました。「周りみんな当たり前のように母の日を過ごしているのに」とつい比べてしまっていました。でも、今は自信を持って言えます。たとえ家族の形が違っても私たちの家族には、他の誰にも真似できない強さとあたたかさがあります。苦しい時こそ私たちは支え合って乗り越えてきた。その積み重ねが私の土台になっています。

これから先も悩むこと、迷うことがあるかもしれませんが、私は父と兄と過ごした日々を胸に、自分らしく歩んでいきます。そして、いつか、自分の言葉で誰かを励ましたり、救ったりできる人になれば・・・。

それが、私のささやかな夢です。